

調査報告

喜多方の農耕屏風

——猪俣家蔵屏風を中心に——

佐々木長生

SASAKI Takeo

はじめに

筆者は、前に「喜多方の農耕絵馬」および「喜多方の農耕絵馬（続）」その1～4で福島県喜多方市内の稲作を描いた絵馬を紹介した。前者は天保8年（1837）ごろの江戸後期、後者は明治40年（1907）奉納の紀年銘のあるものである⁽¹⁾。

両方とも、奉納されている神社付近の農村出身の絵師によって描かれており、喜多方地方の農具や服装、神社付近の景観に沿いながら描いていることを指摘した。また喜多方市内には、上三宮の三島神社に天保4年（1833）銘の春夏秋冬4枚に稲作を描いたもの⁽²⁾、奉納年代は記載されていないが同様に春夏秋冬4枚に稲作を描いた慶徳の稲荷神社のもの⁽³⁾、山都町相川の熊野神社には慶応元年（1865）に田植えや稲刈りなど四作業の光景に和歌が添えられたもの⁽⁴⁾等、会津地方でも集中して農耕絵馬が存在している。

本稿では、喜多方市慶徳町松舞家字新町の猪俣泰治氏蔵の明治22年（1889）に制作された農耕屏風を紹介したい。宮中の八幡神社蔵の絵馬には、喜多方地方の近世の農業光景が描かれているのに対し、熊倉町館の稲荷神社の絵馬には馬耕（犁）や除草機の使用など、近代の農業光景が描かれている。

猪俣家蔵の農耕屏風は明治22年の制作で、前二者の農耕絵馬の中間的な時代に描かれており、喜多方地方における近世の農業技術から近代農業への発展過程を垣間見ることができるのではないかと、いう試みのもと、描かれた農作業光景を分析してみたい。

また、慶徳町には文化4年（1807）の『慶徳組風俗帳』、慶徳村付近の風俗書上げもあり、江戸後期の風俗や民俗、当時の農業技術なども見ることができる⁽⁵⁾。本稿は、前二点の農耕絵馬と比較照合することにより、喜多方地方の近世から近代への農業技術の変遷を示すことを目標に若干の考察を行いたい。

1. 慶徳村と猪俣家蔵の農耕屏風

慶徳地区は、昭和29年の喜多方市合併以前の旧慶徳村の中心地であり、慶徳寺や稲荷神社・古四王神社などの名刹や名社が存在する。文化6年（1809）の『新編会津風土記』によると慶徳村付近の慶徳組について、「東ハ平地ニ続キ、西ニ山連リ、村落半ハ山ニ倚リ半ハ平野ニ住ス、南ニ日橋川ヲ帯、中間ヲ濁川流レ、養水薪樵ノ便ヨク田畠多シ、其土油菜大豆藍木綿ニ宜シ、農隙ニ筵ヲ織テ生産

ヲ資ク、」と記載され、山間と平野との接する地域で、日橋川や濁川など水量の豊富な川も流れる農業に適した地域であることを記載している。⁽⁶⁾

慶徳村近くの新宮地区には、中世からの熊野信仰を裏づける重要文化財の熊野神社長床も存在する信仰の里でもある。慶徳稲荷神社には「殺生石」の伝説もある。『新編会津風土記』によると、「稲荷神社 村南三町山麓ニアリ、相伝フ源翁慶徳寺ニ住セシ時、或夜何クトモナク一女子アラハレ、師ニ謂テ云、某ハ和尚ノ濟度ヲ蒙リシ那須野ノ殺生石ナリ、自今仏法擁護ノ神トナリテ頓生成仏ノ恩ヲ報セント、即白狐ノ形ヲナシ須臾ニマタ十一面観音ノ像ヲ現シ、南ニ飛テ稲荷山中ノ中ニ入ル、因テ一社ヲ造営シ此神ニ崇ムト云^{慶徳寺ノ条下ニ併見ルヘシ}、(以下略)」と信仰に関わる伝承がある。

稲荷神社には、前述したように江戸後期から明治初期ごろにかけて奉納されたと見られる春夏秋冬4枚に稲作を描いた絵馬が社殿に掛かっている。「奉納」という銘はじめ年号等は記載されていない。また、半夏の7月2日には「御田植之祭」が毎年行われている。⁽⁷⁾ 神社近くの神田で、早乙女が早苗を植えて豊作を祈る。畦には笠を被った田植え人形が立てられる。子供たちは白装束姿で、小さく木で作った馬鋤やエンブリ・鋤などの農具を持って参加し、田植え歌を歌う。早乙女たちはその歌に合わせて、田植えを行う。

また、「最明峠」や「比丘尼平山」など信仰に関わる伝説の地名もある。『新編会津風土記』によると、「最明峠 村西十七町ニアリ、小布施村ノ方ニ踰ル峠ナリ、最明寺入道時頼、諸国行脚ノトキ、此所ヲ通行アリシ故名クト云、」^{サイミヤツ}、「比丘尼平山 村南二町四十間余ニアリ、中ニ方二十間計ノ平アリ、昔ハ百比丘尼^{堀川組金川村ノ条下ニ併見ルヘシ}トテ長寿ナル尼爰ニ住シ、金ヲ埋シ故此名アリト云」とある。

慶徳付近は、『新編会津風土記』にも見られるように農業に適した土地であったことがわかる。文化4年の『慶徳組風俗帳』にも、「当組出作の儀は大凡田畑共に中の上位に相見え申し惣て田方進みの場所に御座候、」とある。慶徳の農業に適した土地柄は、「会津の伝統野菜」にも選定されている「慶徳玉葱」にも象徴されている。会津の伝統野菜を守る会編のリーフレット「会津伝統野菜」によると、「慶徳玉葱 7月下旬～9月中旬 喜多方市の慶徳が発祥で会津全域で生産されています。食べては甘味が強く柔らかでサラダなどの生食に向いています。」と紹介されている。⁽⁸⁾ また、慶徳の西瓜も甘くおいしいとの好評を得ている。

猪俣泰治家は、慶徳村の一地区の新町にあり、新町の中央を通る道路沿いの小布施峠に向かう曲り角に建っている。蔵座敷続きの主屋と、附属小屋などが屋敷内に存在する。村から小布施峠に向かう山際には、古四王神社があり、その左手には長伝寺がある。古四王神社は「古志王」などとも記され、会津地方の各地に点在する。その中でも慶徳の古四王神社は著名で、文政13年(1830)奉納の遠藤香村筆による「山伏と子供」の絵馬がある。『新編会津風土記』の宮在家村の記載によると、「腰王神社^{境内十間四方、免除地}村西二町十間山上ニアリ、祭神ハ市千魂命ナリ、鎮座ノ年月詳ナラス、鳥居アリ^{別当四天王ノ木像ヲ安置セル}故、古四王トイヘリ、此山松杉蒼鬱トシテ鶴ノ翼ヲ張レルニ似タリ、故ニ鶴森ト云」とある。古四王神社は、屏風の中にも描かれている。長伝寺も当時の光景で描かれている。

筆者が最初に猪俣家の農耕屏風を見たのは、昭和61年会津若松市で開催された「会津に遺る 風俗図屏風」展である。その展示図録で坂井正喜氏は、「四季農耕(慶徳)図」とキャプションを付している。小荒井輪鼎筆 3尺6曲1隻の屏風である。坂井氏の解説によると、「本図は春の種蒔から秋の収穫までを半双の屏風にまとめたものである。作者小荒井輪鼎は耶麻郡小荒井村(現在、喜多方

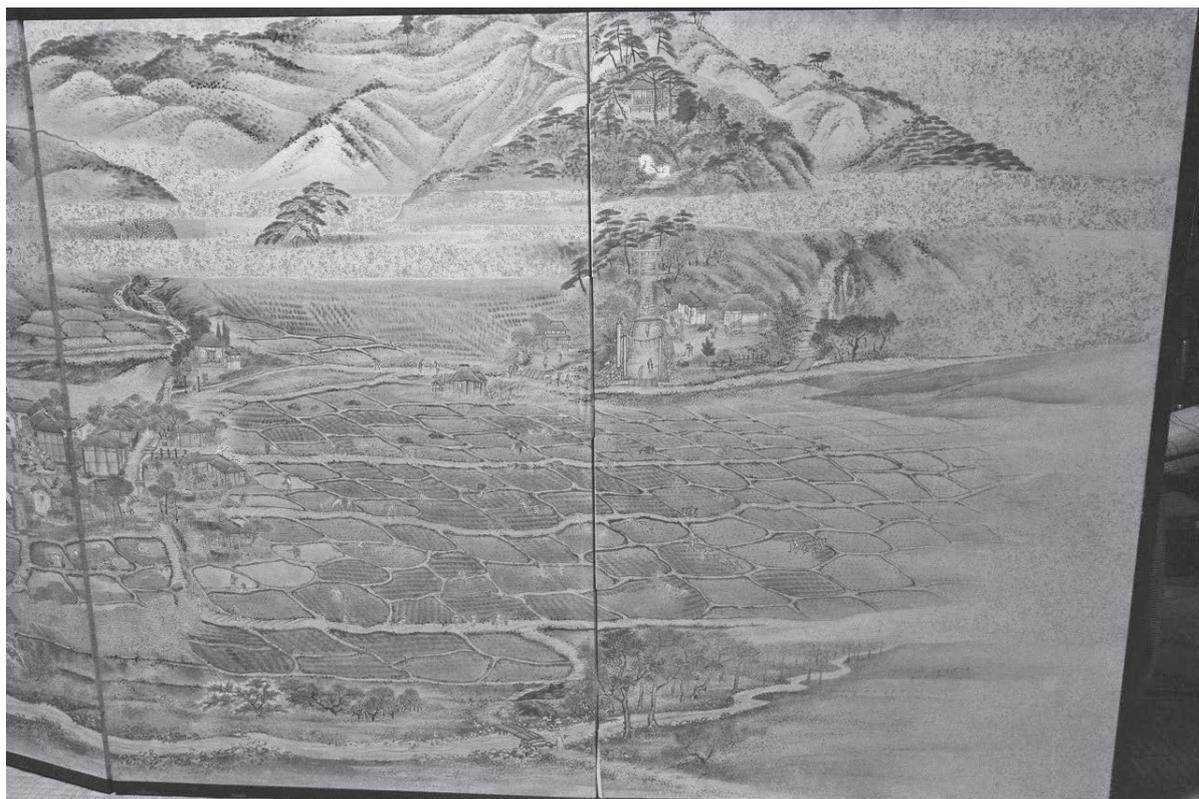


写真1 1曲(右)2曲(左)春の農耕風景

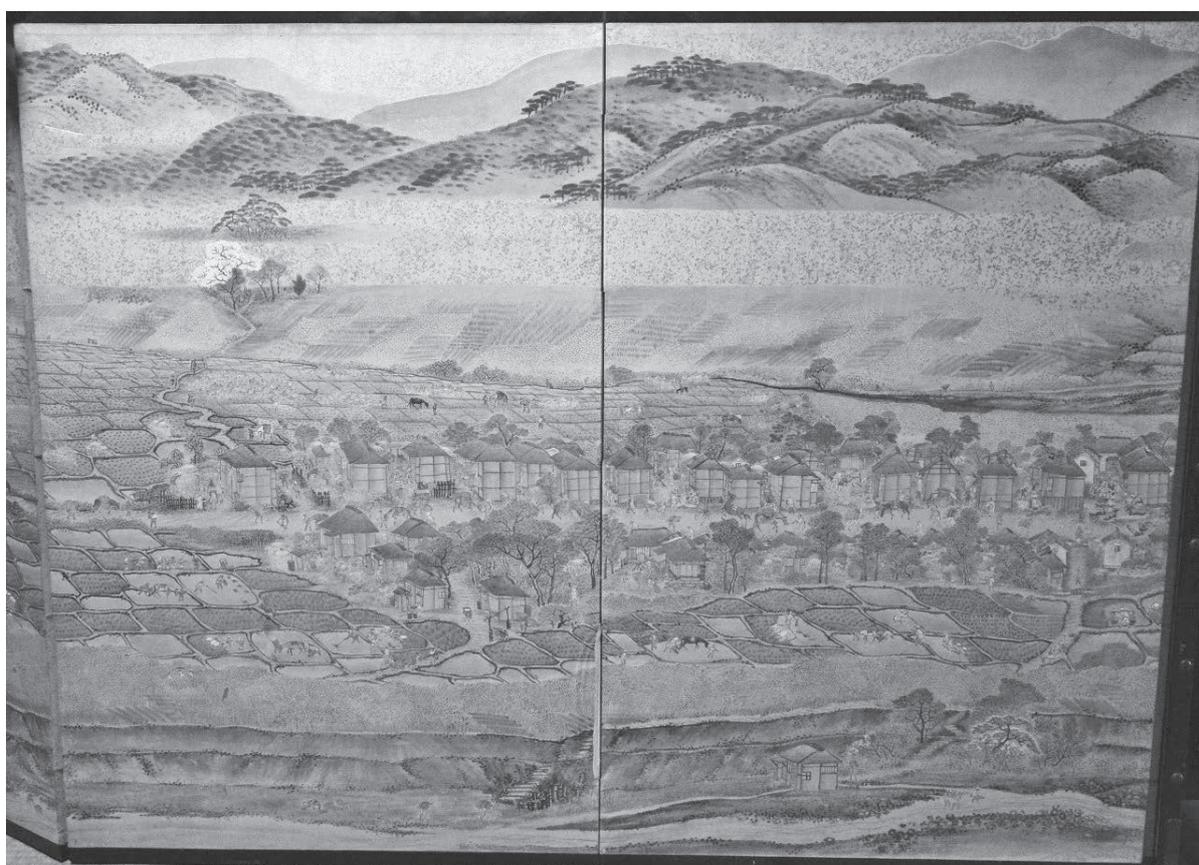


写真2 3曲(右)4曲(左)秋の農耕風景



写真3 5曲(右)6曲(左)春の農耕風景

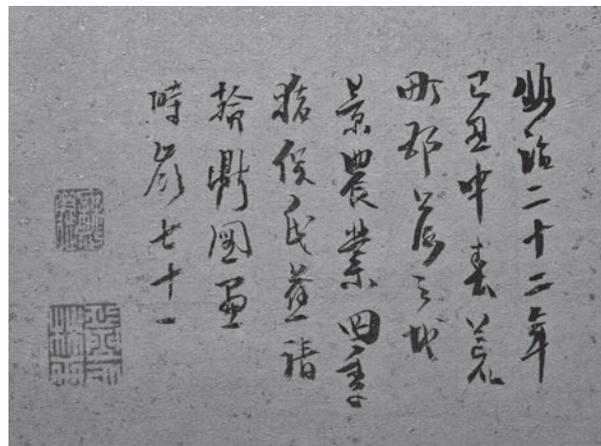


写真4 6曲に記載された輪鼎の賛文

市) 生まれ、少年のころ若松に出て四条派の画家遠藤香村に師事した。後年香村の衣鉢をうけた1人で佐藤香斎・星暁邨・遠藤霞村とともに香村門の四天王にあげられている。作品は少なかったが遺作には名画が多い。この図は明治22年春、慶徳村新町猪俣家の依頼で同家を訪れ、農事の実景を写したもので、複雑な農作業を破綻なくまとめた技術はさすがである。」と述べている。⁽⁹⁾

現当主の猪俣泰治氏によると、小荒井輪鼎は猪俣家に約1ヶ月ほど逗留して制作したという。輪鼎は、明治31年に79歳で病没しているなので、この屏風は晩年の制作といえる。坂井氏も指摘しているように、多くの作業を描き、その中に多くの人物が働いている姿を離れては見えぬほどに細密に描い

ている。輪鼎自身が喜多方市小荒井生まれであることから、使用している農具や服装、そして民家、山・川など、集落の景観も忠実に描いたものと見られる。すなわち、真景図として制作されていることがわかる。

この屏風を制作した当時の年齢が、71歳であるところから見ると、少年から壮年時代は江戸時代後期であり、『慶徳組風俗帳』に記載された民俗の世界を生きてきた。そのため屏風に描かれた人物や作業光景も、この時代の農作業の様子が反映されているものと考えられる。

2. 『慶徳組風俗帳』にみる稲作と民俗

慶徳周辺の近世における農業の様子を記述したものに、『慶徳組風俗帳』がある。簡単な記述ではあるが、当時の稲作について記載しており、ひとつの指標となるので、引用しておきたい。

一田うなひの節、若者共ゆひと申し励みに五、三人番廻りにうなひ申候儀も御座候、凡て朝早く出、昼飯の前後に一度づつ小昼と申、食少しづつ給へ申候、田うなひ仕舞塊返し致し岡田多く候間、五月節より十日も前日より荒塊搔き申候、五月の節より田植始め申候、其前日一ト通りうなひ候儀をかいとふうなひと申候、植始めより十日計りにて仕舞十六七日過ぎ候て草取始め候、土用中まで三廻り取仕舞申候、稲熟し二百十日頃より十日計過候得ば御年貢物の節に相成候間稲刈始申候、秋土用は稲刈土用と申候間、其節までに刈仕舞、十月始頃までに揚仕舞乳に積み、追々米に致し納米とし又売米に致し、金方の御年貢に仕候

また同風俗帳の「田畑耕作の時節」には、「種子浸」から「晩稲」の収穫までの時節を記載している。ここには前述にない、「苗代拵」などがあるので、併せて引用しておく。

- 一種子浸 春彼岸後三四日の内に浸り候
- 一種子揚 春土用中六日の内に上げ申候
- 一苗代拵 春土用中六日の内
- 一田 打 春土用中入より打始
- 一種子蒔 春土用末六日の内
- 一塊返し 四月の中四、五日以前より
- 一荒塊代搔 四月中より
- 一田 植 五月節より植始め十四、五日の内に植仕舞申候
- 一早 稲 は植て八十日には切らず米となり申候
- 一糯 稲 秋の彼岸中に米になり候
- 一中 稲 同彼岸より刈取り申候
- 一晚 稲 九月の節頃より刈り申候

気象に大きく左右される農業において、旱魃は農民にとって死活問題である。『慶徳組風俗帳』に

は、文化4年当時の雨乞いの方法が記載されている。特に、大淵に生きた燕を投げ入れる方法は注目すべきである。

雨迄 打続き早の節は諸作相痛み候節、雨乞と申一組中集り高山へ登り、或は堤淵杯へ参り候時も有之候も、先づは所々鎮守へ一村切に籠りの儀も御座候、山へ登り堤淵杯へ集りし時は鐘、太鼓を打、貝を吹き、ときのを上げ其囃に雨を三方いわふた西から雲が舞ひ、かこるゝとはやし申候、亦其本村の内大川に淡(海)の巻といふ大淵あり、之へ生きたる燕を、沈めしときは雨ふると云伝ふ

また、蝗いなごやウンカ等の害虫も多く発生する夏期になると、「虫送り」の行事が行われていたと記載されている。宮中の八幡神社の農耕絵馬には旗を持ち、虫送りを行っている様子が描かれている。

虫送り 夏土用前稲へ付候虫を送るといふて、若者共集り紙旗数多作り、竿の先へ結びつけ鐘太鼓を打ち、貝を吹き何虫送るやーい稲虫送るやーいゝとはやし、村境の川へ流し申候

このような呪術儀礼を行って、九月には収穫を祝う行事が行われてきた。

九月

九日 重陽の節句と申餅を搗き遊申候、此日村村鎮守の祭礼多く御座候て有之候

十九日 中の節句と申、今日を重ねて祝ひ候村方も有之候

廿九日 刈上餅又秋餅とも申し餅を搗き田の神へ供へ申候、併此日計に不限、十月となり勝手ゝに秋餅搗き無此親類或は田植に手伝候者を招き振舞申候

3. 農耕屏風に描かれた稲作

猪俣家蔵の農耕屏風は、3尺6曲1隻である（幅378cm高さ91cm）。ここに描かれているのは、狩野派の絵師たちが描く農耕屏風とは違い、種子扱蒔きから田植え・田の草取り、稲刈り・稲干し、脱穀・調整、そして蔵入りと耕作順に描かれたものではなく、慶徳村新町地区の集落や山・川そして水田等を描き、その中に稲作を中心とした作業や季節の景観をも描いている。村中の道路・峠道などや猪俣家の屋敷取り、古四王神社や長伝寺の位置や山容なども現風景と一致するような構図で描かれている。そのためか、同じような作業光景が多く描れ、多くの人物が描かれているのが特色である。地元の喜多方市小荒井村出身の絵師によって描かれているため、描写も細密で屋敷取りや農民の服装・農具なども、喜多方地方の姿をよく描写しているといえる。

全体の構図を見ると、左側から1曲、2曲と見た場合、1曲と2曲には春の農作業が主で、堆肥きゆうひや厩肥運搬と田うない・塊返くれなどが見られる。苗代で苗取りをしている光景もある。上方には、村西の山並を描き、その中腹や麓に鎮守の古四王神社と檀那寺の長伝寺を描き、そこには宮司や住職と語り合う村人の姿まで描いている。

3曲と4曲は中段に新町の家並を描き、屋敷内では稲刈りと稲扱き・籾摺り・選別作業を中心に描いている。猪俣家と見られる家の庭先では、稲扱きと籾摺りなどの収穫作業を描き、豊作に喜ぶ光景であろうか。集落の下方では代掻き（水田に水を入れて土塊を砕く作業）や田植えなど、農家では最も忙しい農繁期を、集落をはさんで上方と下方に描き、屏風の中央に配している。

5曲と6曲は、上方に稲刈りや稲揚げ、下方には代掻き・田植え・田の草取りを描いている。村はずれでは、養蚕のための桑摘みを行っている光景が描かれている。6曲上方には、輪鼎が猪俣家のために、71歳の時に描いたとの賛文がある。

描かれている作業は稲作中心であるが、川原での菅刈り、山から薪を背負い運搬、魚獲り、街道や峠道を往来する人々、神社や寺へ参詣する人々等々、農作業を中心としながらも村内の光景も描く、いわゆる真景図の手法で描かれている。農作業では、田うないと堆肥や下肥などの肥料運搬と施肥作業が、多く描かれていることが指摘できる。これは輪鼎が春に描いているところから、田うないや肥料運搬など、制作時期の農作業を目の当りにすることができたからではなかろうか。作業が各曲に点在するように描かれている点も、特色といえる。

このように各曲に従って農作業が描かれていないので、農耕順に作業を紹介してゆきたい。なお比較資料として、宮中の八幡神社や慶徳の稻荷神社の農耕絵馬と、熊倉町館の稻荷神社の農耕絵馬とを比較検討したい。また、近世の喜多方地方の稲作を知る資料として、宝暦13年（1763）に中野義都が著述した『北郷鄙土産憐民政要』⁽¹⁰⁾を引用したい。同書には当時の稲作の様子を描いた絵もあるので、農具の形態等の参考にしたい。

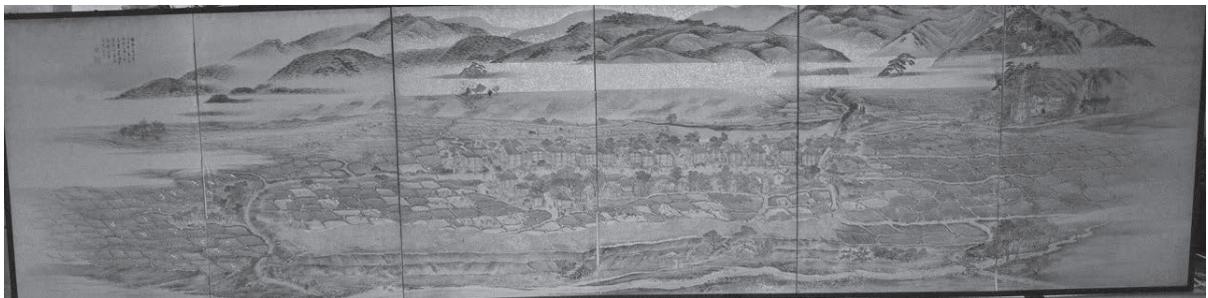


図1 「農耕屏風」全体

(1) 田うないと塊返し

会津地方はじめ福島県内では、田起しの作業をタウナイと呼んでいる。貞享元年（1684）佐瀬与次右衛門著の『会津農書』⁽¹¹⁾では、「田塙生」と記述している。『慶徳組風俗帳』では、「田打」と記述し、「春土用中入より打始」とある。会津地方における「田うない」は、古くは「平鍬」を用いてきた。三本鍬（備中鍬系）は江戸後期ごろと見られる。

遠藤香村の江戸後期制作と見られる農耕屏風には、三本鍬で田うないを行っている光景が描かれている⁽¹²⁾。また、文化12年（1815）写の『会津農書』下巻の欄外に注記的に「三本鍬」の記述が見られる⁽¹³⁾。文化10年代には、会津平坦部では三本鍬による使用があったものと見られる。ただ、猪俣家蔵農耕屏風には、平鍬による田うないの光景が描かれている。

喜多方地方で田うないに、どのような平鍬を使用してきたかを示す資料に、『北郷鄙土産憐民政要』

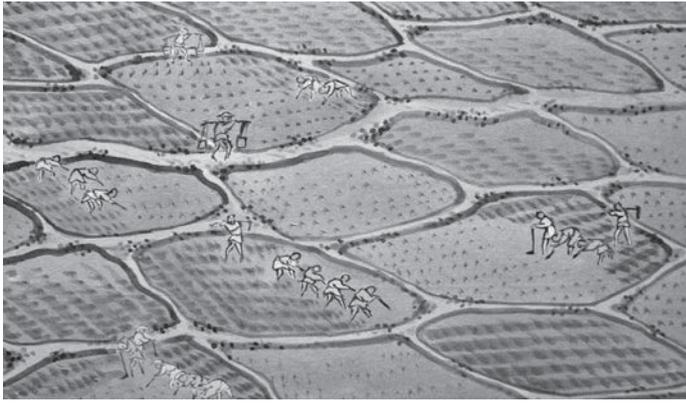


写真5 田うないと塊返し風景
振桶で下肥をかついでいる田は、2人の男性が塊返しを行っている（上部）



写真6 田うない（写真5部分拡大）
左端：畦切鎌を持つ男性
右端：鍬をかつぎ歩く男性

の記載がある。「先新搔生とて鋤を以て是をうがつ、其鋤の重さ五百めより六、七百めに及びぬ、是を以て六十の翁より十五の弱子に至るまで一日に二、三畝を以て限りとす、」と、500目すなわち約1・9キログラムほどの重さの鋤である。

この屏風が描かれた明治22年には、馬耕（犁）は使われていないようである。明治40年の熊倉町館の稻荷神社の農耕絵馬には馬耕が描かれている。喜多方地方では、明治22年から明治40年ごろにかけて「馬耕」と呼ぶ犁が使用されるようになったと推測することができる。

馬耕が東北地方で使用され始めるのは、明治10年代以降である。青森県七戸町の神社には、明治16年に熊本県の馬耕教師が馬耕の講習をする絵馬が奉納されている⁽¹⁴⁾。また庄内地方にも明治30年代に馬耕使用の絵馬や馬耕の模型をはり付けた絵馬が奉納されている⁽¹⁵⁾。



写真7 馬耕講習図 明治16年（1883）池ノ平神社（青森県七戸町）
青森県立郷土館企画展図録『青森県の産業絵馬展』より

田うないは、「朝より夕まで三拾余日に及びて耕し」と、重労働で長期におよぶ農作業であった。そのため、休憩をとっている光景が描かれている。田うないの休憩は、『北郷鄙土産憐民政要』にも描かれている。煙管でタバコを吸っている光景があり、宝暦13年当時、農民の間にもタバコがかなり普及していたことがわかる。

この屏風では、男2人が休んでおり、その傍らには平鋤と畦切鎌^{あぜきりがま}がある（写真6）。文化4年の『熊倉組風俗帳』によると、「田打仕舞、二日斗畦切に掛り夫より塊返しに四日位掛け申候、」とある

ように、塊返し前に畦を切り起こししやすいようにするとある。「畦切鎌」が農耕図に描かれているのは、まれな例である。畦切鎌は、鎌の刃に長い柄を付けたもので、両手で握って畦を切り込む。

いったん田をうなったら、「塊返し」といって、もう一度うない土塊を細く打ち砕く。『慶徳組風俗帳』には、「塊返し 四月の中四、五月以前より」とある。『北郷鄙土産憐民政要』には、「四月中旬に成りぬれば、早苗も段々生長し、^{あらうない}雑塙生せし田も、過半再びあらうないせし田を^{くれ}鋤を以て、是をうかぢかえす、是を塊かへしと云、是ハ地上につきたる処を打かへしてうへになし、日にほし侍れば、上下の土ともにひてよろしき也。」と、塊返しの効用を説いている。

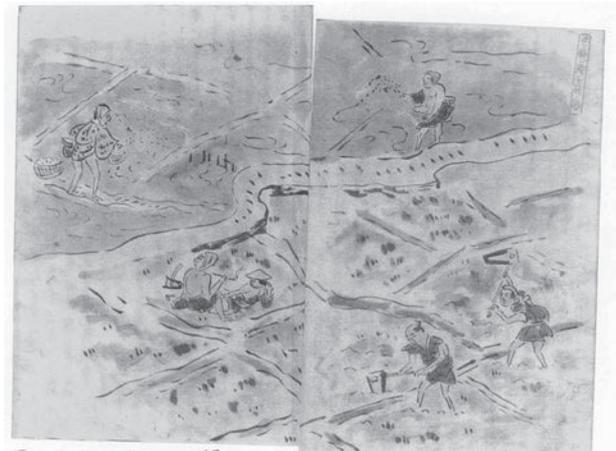


図2 田うないと種子扱蒔き光景
宝暦13年(1763)『北郷鄙土産憐民政要』(中野義都著)より

(2) 肥料運搬および施肥方法

田うない前に、水田に厩肥や堆肥を運搬する光景が多く描かれている。特に、タレバカマ(垂袴)と呼ぶ馬の背による運搬具が多く描かれている。堆肥運搬は、寒中の堅雪になると、櫓で堆肥を運搬する方法が、会津地方では多く行われてきた。『北郷鄙土産憐民政要』には、喜多方地方における堆肥運搬の様子を詳細に記載している。

二月中旬になりぬれば、段々雪もむら消えに及びぬれば、男女厩の糞土をせおひ雪かけわけて寒風もいとはず、遠近の田に運びぬる事一日に幾度といふ事をしらず、足には藁くつをはくといへとも雪水にふみ入るれば、寒水に指を指す思ひをなし、是に駢ひびわれ、疼痛すといへども顧みず、顔にハツ巾を蒙れども春風吹通し、^{きん}饑寒肌をさす、然れども雪上に持はこびぬる厩の糞を手を以て散らし置て一円の晒とし、(後略)

この屏風に描かれているタレバカマは、木の四角枠の左右両側に縄編状の袋を付けたもので、これを馬の背の荷鞍に装着するものである。袋部に厩肥や堆肥を上部から入れ、下ろすときは左右の袋の下部の縄を同時にほどき、田面に落とすものである。屏風には、このようにして下ろしたと見られる堆肥の小山が、点々と見られる。

堆肥作りも重要な作業であった。堆肥踏みで疲れたのか、堆肥枠に腰を下ろして休んでいる農夫が描かれている。屏風には堆肥を入れて運ぶ光景や、空になったタレバカマで家に帰る光景など、詳細に描いている。また、タレバカマを着けて暴れている馬も見られる。熊倉町館の稻荷神社の農耕絵馬にも見られるように、まだ雄馬の去勢技術が発達していなかった様子を描いているものと見られる。また、タガラで堆肥を運ぶ男も描かれている。タガラは、農家の近くの水田に運搬するのに多く用い背負籠である。

この屏風には、フリオケ（振桶）をテンビン（天秤）で担ぐ姿が描かれている。男は、青いジバン（上衣）にサルッパカマ（下衣）をはき、笠を被っている。フリオケから肥柄杓で、下肥を水田に撒く光景も描いている。田をうなった後に、堆肥や下肥を蒔き散らしている農夫が描かれている。塊返しを行った田へ、下肥を振り付けているものであろう。

『北郷鄙土産憐民政要』には、塊返しから荒くれ搔き（碎土した水田に水を入れ土塊をやわらかくする）前の施肥の様子が詳細に記載されている。

扱て塊耕せし田を馬屋のこひ草杯、或は糞等桶^{こやし}などへ入かつき、或は馬につけ、或いは荷ひて持運ぶ手を以て打ちらし置、扱干泥田^{ひどろた}とて常に水有て泥も深き田有、是もうない置き、此時水こゑなど入れ、後岡田へは水を付け置



写真8 肥料運搬および施肥光景



写真9 タレバカマによる肥料運搬（写真8の部分拡大）
上方の水田には、タレバカマで運ばれた堆肥が見られる



写真10 タガラでの堆肥運搬（左）
振桶での下肥運搬（右）



写真11 振桶から肥柄杓で
下肥を振りつける



写真12 種子扱蒔きと苗取り光景



写真13 種子扱蒔きと種子蒔き桜
馬の背にタレバカマを掛けている（左）
タレバカマで堆肥を運ぶ（右）



写真14 苗取りと苗籠に苗束を入れる

(3) 苗代作りと種子扱蒔き

『慶徳組風俗帳』には、春彼岸3、4日のうちに種子扱を水に浸し、春土用中6日のうちに種子扱を揚げ、苗代拵・種子蒔きは春土用6日のうちに行うとある。春土用は、太陽暦では4月17日にあたるので、種子蒔きは4月20日ごろになる。

2曲の下方に種子扱蒔きの様子が描かれている。男性2人が片手にザルを持ち、もう一方の手で蒔きつけている。その下方の苗代では笠を被り、袖無を着た老人が種子扱を蒔きつけている。そこに女性がザルに種子扱を入れて運ぶ姿もある。またもう1人の男性のそばには、子供が話しかけている光景を描いている。老人が袖無を着ているところからも、まだ肌寒い季節であることがわかる。4曲の上方の神社前には桜が咲いているが、これは種子蒔桜と見られる。

『北郷鄙土産憐民政要』にも、種子扱蒔きの光景が描かれている。ほっかぶりをした男性が、ザルを持ち蒔きつけている。足元には種子扱を入れたザル、腰にはハケゴを着けている。ハケゴは、他地方ではビクと呼ぶ腰籠である。種子扱の蒔き方を詳細に記述している。

是（種子扱）をうつはものへ入れ、田に持行き、風なき日是を蒔く、尤まくものは家の内に

て年高きひとにて、此種子を盃或箆籬等に入、畔端に立て、是を蒔也、其蒔散す事ハあたかも東風に花を散らすかごとくにして、むらなく一面に薄く、是ハ習ふにかたく、自然の手の内の鍊磨也、

種子蒔きが終わったあとに、「水口まつり」といって苗代の水口に蒔き残りの種子粃を、焼米にして供える風習が、喜多方地方でも昭和30年代まで行われてきた。『熊倉組風俗帳』には、「焼米春焼米は鳥の口と云ひたし種子を焼米にして、苗代田の水口へ少し蒔候へば、鳥種子を不喰と申して致事に候、秋焼米は早稲出来候か吉日を選び刈候て焼米に拵へ、田の神へ供へ申候⁽¹⁶⁾」と、喜多方市熊倉町付近の水口まつりの様子を記載している。水口まつりについては、『北郷鄙土産憐民政要』にも記載されている。「田の苗代にみな口まつりとて上代は幣帛を立て祭りし也、」とある。

苗を取った後の苗代を、もう一度代搔きを行って苗を植える苗代を、『会津農書』では「穎付苗代」と呼び、苗代専用のものを「倒苗代」すなわち「通し苗代」と呼んでいる。『北郷鄙土産憐民政要』には、穎付苗代の耕作儀礼として注目すべき記述がある。苗代への種子蒔きの図にも、「芳を三尺斗りに切り」立てたような光景が描かれている。

苗代を再び耕し、水糞^{みづこひ}をふり、馬にて代をかき^{しろ}、土をやはらげ置き、或は畔を立、色々の稻種をまきぬる処を培ひし置て後、芳^{よし}を三尺斗りに切り、一まいの苗代江八九本宛立待る也、此事俗説のみ云ひてきたかならず、僕数年に是を思ひぬるに、此歌の集めの中に一首みあたりぬ、和歌に、

若水をせくみなくろにいくしたて、

苗代小田に種子蒔にけり

と此歌を思ひ待るに是古風の残れる処也、いかんとなれば、いくしとは五十串なり、五十串とは被^ひをする時してをはさむ串也、今の幣串の事也、

佐瀬与次右衛門著の宝永元年（1704）の『会津歌農書』には、「苗量」が記載されている。「苗丈を計るための木」で、種子蒔きの目標にするものである。「苗代に苗たけはかる木を立よ たねまく時の目あてにもよし⁽¹⁷⁾」とある。佐瀬与次右衛門の村、幕内周辺では苗代を均した後、葦の茎を2つに



写真15 田の神 会津若松市湊町
苗代にヨシを×印に立て、これを田の神
といって豊作を祈る



図3 種子蒔きと葦棒か(右) 図2部分拡大

折って苗代に立て、「これでよし」としていたという。

葦や竹等を苗代の田面に突き刺し立てる風習は、福島県内にも見られる。これを「苗見竹」と呼んでいる。また、会津若松市湊町では、×印に葦を立て、種子粃を蒔きつける。これを「田の神」と呼び、苗の無事成育を祈る。

(4) 代掻き

『慶徳組風俗帳』では、「荒塊代掻4月中（太陽暦5月21日）より」とあり、主に馬鋤による代掻きが行われる。この屏風には、3ヶ所ほど馬鋤による代掻きが描かれている。代掻きは「鼻取り」と呼び、馬の口部に棹を取り付け、これを主に子供が持ち、代を掻く場所に馬を導く。馬鋤を手にするのは大人の男性で、「尻鋤取」と呼んでいる。尻鋤を取る男性は、蓑笠を身に着け、泥はねを防いでいる。子供は手ぬぐいをほっかぶりしている。子供にとっては、重労働である。馬には馬鹿にされ、尻鋤を取る大人には叱られるという辛い仕事である。そんな子供に代わって、地藏様が鼻取りを行ったという鼻取り地藏の伝説が各地にある。『北郷鄙土産憐民政要』には、「あらくれ」の様子を次のように記載し、図にも描いている。



図4 代掻き
『北郷鄙土産憐民政要』部分より

天水を引き入れ一夜置てあらくれとて、馬に耙まぐわといふものをゆわひつけ、小児鼻竿とて五、六尺の竹を馬の輿にゆわいつけ、是を取てひく、農夫は耙に手をかけ、土の上に是をしかと押付る時、かの馬をひく時は馬の行くに従ひて耙にて土おのづからくだけ平と成りて土もまた柔と成る。

馬鋤で荒代を掻いた後、田面の凹凸をなくし平らに均す作業を、エブリ摺りと呼んでいる。エンブリとかエブリと呼ぶ半月形の板に、長い柄を付けた農具を用いる。「均す」は「不成」に通ずるところから、「摺る」という伝承もある。宝永年間（1704～10）著述と見られる『会津農書附録』八で、



写真16 代掻き・田植え光景より

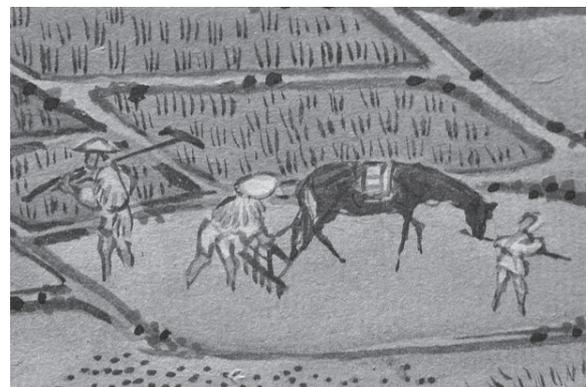


写真17 代掻き
鼻取り（右）尻鋤取り（中）エンブリを担いだ男性（左）

著者の佐瀬与次右衛門は次のように説明している。⁽¹⁸⁾

問て曰、農家にて苗代平（ナラス）に机にてならぬ物といひ伝え、棹にて均ハ故有事か。

答て云、机にてハするといひ、棹にてハ均と云。是農家に定る言葉なり。苗代ハ惣田の本なれハ、すると言を忌て机を嫌なり。稲に実をならずと祝て棹を用なり。亦其者の勝手を以、敷居なとの様成木を以均す者もあり。

荒塊搔きした後、田植え前日にもう一度うなう。これを「かいとふうなひ」と、『慶徳組風俗帳』は記載している。

(5) 田植え

『慶徳組風俗帳』には、田植えは「五月節より植始め一四、五日の内に植仕舞申候」とあるように、太陽暦の6月6日から14、5日のうち、遅くとも半夏（7月2日）までには行うという。慶徳村付近では、稲荷神社の御田植祭が半夏に行われるが、それまでは田植えを終わらせるという伝承が、現在までも存在する。

この屏風では、田植えを行っている早乙女たちは、手拭いや菅笠を被り赤い帯を締め、前垂を着け裾をまくりあげ、サルッパカマ（山袴）等の下衣を着用していない。白い襦袢を下着のように着用し、正装した状態である。現在稲荷神社で行われている御田植祭の早乙女姿から、当時の姿を垣間見



写真18 慶徳稲荷神社の御田植祭



写真19 田植え光景

ることができる。『慶徳組風俗帳』には、当時サルッパカマが着用されていたことが記載されている。「作人田畑山野へ出候節、襦袢、半切の類短き物を男女共着、猿袴股引などにて稼き申候、」とあるが、この屏風には、サルッパカマの着用は見られない。輪鼎は、意図してサルッパカマ着用以前の様子を描いたものと見られる。

田植えに際し、苗代で苗取りをする男性、その苗を苗籠にのせる男性や、畦には苗を入れた苗籠、苗籠を天秤で担ごうとする男性など詳細に描かれている。また、タガラと呼ばれる主に堆肥を運ぶ背負い籠に苗束を入れている様子と運んでいる姿、苗運搬の様子とその運搬具も、喜多方地方で田植え機械が使用される以前の農具が描かれている。

この屏風に特徴的に見られるのは、田植えの昼食光景や昼食を運ぶ様子、休憩をしている様子が詳細に描かれている点である。天秤で苗籠のようなものに、重箱やホカイ（行器）などを入れ運ぶ男性、それを支えるような様子の手拭いを頭に掛けた女性な



写真20 田植えをする早乙女たち、昼食の飯や酒が畦に置かれている
苗運びと苗配りの男性、エンブリ摺りの男性

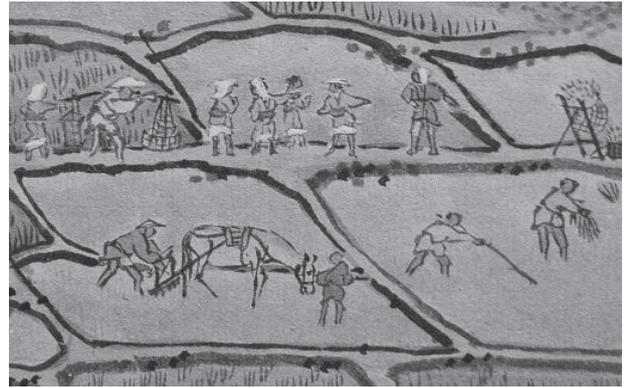


写真21 田植えの昼食を運ぶ男性と早乙女たち
苗を詰めた背負い籠がある



写真22 背負い籠（タガラ）で苗運び



写真23 昼食風景
イジコに赤子が入って寝ている
馬は飼葉桶で餌をたべている



写真24 早乙女の服装

ど。畦では運んできたと思われる昼食、酒の入った角樽や湯の入った鉄瓶（会津ではテドリと呼ぶ）などの食具と、そこには子供たちと老婆、その左方では早乙女たちが田植えを行っているので、食事前の光景と見られる。また、イジコ（藁で造った乳児をのせる籠状の器）に入った赤子や乳を与えている女性など、当時の田植えの様子を垣間見ることができる。

貞享2年（1685）の『高田組風俗帳』によると、現在の大沼郡会津美里町高田付近では、当時の田植えの食物について次のように記載している。「田植の時は三度共に糧を少し入飯を喰、ゆいの者費用取には二度為給、」と、カテ（^{かて}糧、米の補食に入れる食物、大根葉や雑穀など）を少なめに入れた飯を食べていたことがわかる。⁽¹⁹⁾

『北郷鄙土産憐民政要』には、「植初めの祝ひ」という儀礼が宝暦13年当時、喜多方地方で行われていたことが記載されている。

家主、婦女沐浴して植初めの祝ひ成りとして、伊勢（大）神宮を初め田の神鎮守神先祖の霊前に神酒を献じ、此旨を告げ奉りて後、近隣の手伝ふもの来り、酒等を振舞、

田植えが終わると、サナブリといって田の神を祭る儀礼が各地で行われてきた。『熊倉組風俗帳』



図5 さなぶりの光景（『北郷鄙土産憐民政要』）

にも詳細に記載されている。『北郷鄙土産憐民政要』から、喜多方地方のサナブリの儀礼について見てみたい。

植終る時はさなぶりとして大に祝ひ侍る也、此日男女の内少しく家に残り、朝より料理杯して設け、暮に及びぬる時は、近隣の男女を及び手伝ふ人、其外知音杯（等）をまねぎて、酒飯杯を設けて相待つ

扱て農人田を仕舞帰りぬると農具等を悉くあらひ、きよめ、田の神祭りとて神酒をそなへ奉り、後鋤、鎌、耙抓

一切のものへ酒をそなへて其報恩をなしぬ、農礼なり、是よりして皆々打寄り祝ひ酒をとて、其夜うたひまふて一年の大功なりとて祝ひぬ

(6) 田の草取り

『慶徳組風俗帳』によると、「(植始めより) 十六七日過ぎ候て草取始め候、土用中まで三廻り取仕舞申候、」と、三番草まで取ることを記載している。屏風には、1枚の田に女性が菅笠を被り、2、3人ほどで草取りを行っている光景が、集落をはさんで上方と下方とに描かれている。それぞれ成長ごとの除草光景を描いたものか、不明である。手拭でほっかぶりをしているのは、男性とみられる。

田の草取りは炎天下のもとで、蚊やブユなどの虫・ヒルなどにも悩まされる重労働である。蚊除けとして、そば柄や藁・布などを束ねたものに火を灯す「かしふ」・カコと呼ばれるものがある。『慶徳組風俗帳』には、「蚊遣り火を かしふと云」と記載している。

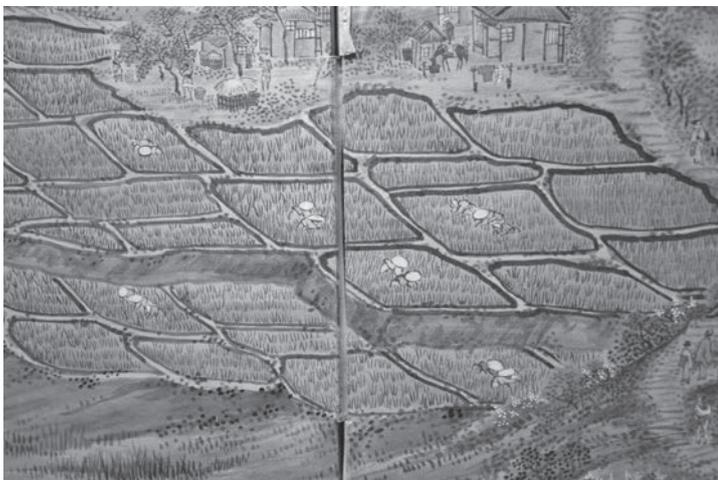


写真25 田の草取り風景



写真26 田の草取りする女性たち

(7) 稲刈と稲干し・稲揚げ

『慶徳組風俗帳』には、「稲刈土用」という農語が物語るように、秋の土用すなわち太陽暦の10月20日ごろが稲刈りが最盛期であることがわかる。この屏風が春に描かれたためか、稲刈りの光景は一場面のみである。男性3人が鎌で刈り、3人の男性が束ねている。

刈った稲は小束に束ね、稲穂を地面に広げるように、これを三把立にして乾燥する。三把立にして乾燥している様子が描かれている。稲刈りを終えた水田には、蓑・笠を着けた案山子が立っている。棒状のものに、縄や布切れをつけたようなものである。これは、雀などの鳥のおどしか不明である。

正徳3年(1713)佐瀬林右衛門著の『幕内農業記』には、「麻のわくそを二筋より合、墨にて染、竹竿を立、右之糸を引張、所々に鳥の毛を結付、風吹ハふハ〜といふに恐て鳥不寄。其外のかゝしハ様々のまねしてかゝし立ても一切不用なり。」と、棹に鳥の毛を結え付けたものを立てたとある。水田に立っている棒状のもの、そこに付いている布状のものは、『幕内農業記』に記載されているような、鳥おどしではな⁽²⁰⁾かろうか。

また束ねた稲を馬の背に積んで、水田の端の山際にニョウ(乳)に積むためか、大きく束ね馬の背に積もうとしている。1人が束ね、2人で馬の背に稲束を積んでいる。馬の口には、積んだ稲穂を食べないように、口籠を付けている馬も見られる。白馬に稲束を積み、運んでいる。ニョウ積場では、馬の背から稲束を下ろし、1人が積んでいる。水田の中にもニョウを積んでいる光景が見られる。ニョウは、屋敷内にも積まれている光景が、多く描かれている。むしろ屋敷内に積むのが多かったようである。

馬の背に稲束を積んで運んだり、蓑を背に当て、稲束を荷縄で運んでいる光景も描かれている。背



写真27 稲刈りと稲干しの光景



写真28 稲刈り



写真29 稲干し(三把立)と稲運び光景

中から稲束を下ろし、背中に蓑を着け、手に荷縄を持っている男性など、詳細に描かれている。また、棒の両端に稲束を突き刺した形で、天秤のように肩で担ぐ姿が描かれている。よく農耕図に見られる光景であるが、会津地方ではこのような方法による運搬は、ほとんど見る事ができない。

なお、『熊倉組風俗帳』には、稲干しと稲揚げの様子が詳細に記載されている。慶徳組の稲干しおよび稲揚げの方法を推測する好資料といえる。ここで注目すべきことは、「稲こきかけ」という記述である。文化4年当時、熊倉組で千歯抜き（脱穀具）を使用していたことがうかがえる。

二百廿日に至り早稲の収納相掛候者、早稲を苜り布干とて把に不到、干ならべ、稲こきかけ^(ママ)に夕、蕙干に致し、摺臼にかけ上米に拵へ御蔵へ相納申候、

稲揚は秋の土用中に凡て干物の分は干不申候へば、土用後に干不申を言伝へ候故、夫を目的に稲も苜始候へば、年寄り赤るみに遅き年は後れ申候、苜稲不_レ残干乾しするひを以て束にいたし、われへ_ノ家へ附運び台所へ入、其余は表へ乳に積置、遠表の取仕舞_レ残片付の内にはや雪もふり候間、乳稲をこきせり、上米に拵へ御年貢米に相納売米をして金方を納、其余を矢倉に貯へ申事に御座候

この屏風には、こうした屋敷内のニョウに積まれた稲束を崩し運び、稲抜きを行っている場所へ、人の背や馬で運んだりしている光景を描いていると見られる。また、雌馬と出会った牡馬が暴れている光景は、当時の世相を反映している。



写真30 稲揚げ光景



写真31 稲ニョウに稲束を積む

(8) 稲抜き

稲抜きの作業は、男女で行っている。右側に描かれている男女の農民は、サルッパカマのような下衣を身に着けず行っている。左側の2名の男女は、脛部が細くなったサルッパカマを着用している。稲束を運ぶ人物もサルッパカマを着用している者といない者と、両方描かれている。



写真32 稲抜き風景

千歯扱きの使用方法も踏板が描かれ、そこに足を載せて稲扱きを行っているなど、千歯扱きの使用を熟知した上での描写であろう。しかし、踏板に両足を載せての使用は間違いであろう。稲扱きを行っているそばに、鶏3羽がこぼれ落ちた粃をついばんでいる光景が描かれている。脱穀・調整作業の場に、鶏がよく描かれているのは狩野派の画家が描く農耕屏風にも、しばしば見ることができる。

千歯扱きで脱穀した粃には、穂切れとなったものや、ノゲ(芒)が付いているため、これらを取り除かないと、次の粃摺り作業に支障をきたす。会津地方では、モミブチボウ(粃打棒)と呼ぶ勾配のある自然木で打ち落とす場合が多い。この作業をモミヨウシと呼んでいる。

関東地方などでは、クルリボウまたはカラサオ(唐棹)と呼ぶ、打棒の部分が回転する用具を使用する。『会津農書』下巻の農人郷談によると、「モミ 禾粃、芒麦等ノ鹿ツキ。是関東ニテハモミ之舂トスル也」と記述されている。狩野派の絵師が描いた農耕図では、多くはクルリボウが描かれている。

この屏風には、会津地方で一般的に使用されてきたモミブチボウが描かれている。その脇にある円形の筒状に粃が入っているものは「蕙立」と呼び、蕙を輪状に結え立てているものであろう。

(9) 粃摺り

粃から粃殻を取り除き、玄米にする作業を「粃摺り」と呼んでいる。木摺臼とか土摺臼など、上臼と下臼の合わせ目に粃を注ぎ入れ、上臼を回転させて摺り合わせ、粃殻を剥き取る作業から、粃摺りと呼ばれる。会津地方では、明治以前は多く木製の木摺臼であったが、江戸後期から土摺臼が普及し、臼の周りを籠状に作り、内部に粘土を詰め、臼の合わせ目に堅木の歯を埋め込んだものである。木摺臼が半回転であるのに対し、土摺臼は全回転して粃摺りを行う。



写真33 モミブチボウでのモミヨウシ



写真34 粃摺り光景



写真35 粃摺りと稲扱き
猪俣家の屋敷内での作業
とみられる

この屏風には、籾摺りの場面が2ヶ所描かれている。両方ともヤリギ（遣木）と呼ぶ柄を男性3人が握り、それを前後に押し引き、上臼を回転させる。3人が押し出し、これを土摺臼の脇に立った1人の男性が回転させる。クランクから回転へと動力を変化させるものである。これは多人数の作業で行う場合で、会津地方では天井より長い棹を下げ、これを上臼に取り付け、回転させる方法が多く用いられてきた。上臼と下臼の合わせ目から、籾殻と玄米、未脱稈の籾がでてくる。1人の女性が、箕でこれらを集めている所も描かれている。もう1人の男性は、箕で籾を入れている。土摺臼の使用方を、具体的に描いたものである。

(10) 選別

木摺臼や土摺臼で籾摺りを行った後、まず最初に籾殻を取り除く作業がある。唐箕で軽い籾殻を吹き飛ばす。古くは箕で行ってきたが、『会津農書』には、貞享元年（1684）に会津地方で唐箕を使用していたと記述している。「ぬかを去るにハ昔より箕を以簸、今颯扇を仕ふハまれニ有。」とある。

また、会津地方には「半唐箕」と呼ばれ、選別された穀物が出る樋がなく、真下に落下する構造の唐箕がある。山形県米沢市には天保8年（1837）銘の半唐箕があり、その当時から存在していたことがわかる⁽²¹⁾。熊倉町館の稲荷神社の明治40年（1907）銘の農耕絵馬にも、半唐箕と見られる唐箕が描かれている。



写真36 選別風景 万石・唐箕の使用、俵しめ



写真37 選別風景 半唐箕（上）と万石（下）

この屏風にも半唐箕と見られる形態の唐箕と、「本唐箕」とが2ヶ所の選別作業の絵に描かれている。半唐箕は、喜多方市郷土民俗館にも保管されており、現在の河沼郡湯川村北田の「北田久内」作のものも多く、米沢市の半唐箕にも久内の焼印がある。

北田村は、古くから唐箕・万石の製作地として知られ、唐箕は「北田久内」家で、万石は「小野平兵衛」家で製作されてきた。北田家で明治末に唐箕製造を廃業するにあたり、小野家当主徳吉は、本唐箕と半唐箕の製作方法（寸法）を記載した図面を大正2年（1913）に作成し、以後北田唐箕の伝統技術を継承してきた。唐箕・万石製作の技術を継承してきた小野徳武氏（昭和6年（1931）生まれ）も、平成25年に逝去され、北田唐箕および万石製作の技術が絶えたことは残念である。

籾摺り後の玄米と未脱稈の籾とを選別する農具に万石がある。この屏風にも、唐箕のそばで万石に

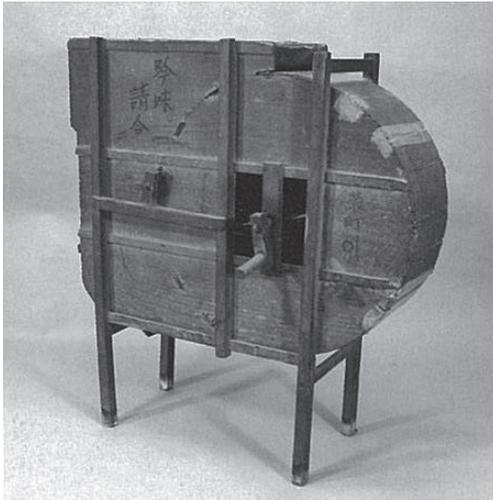


写真 38 半唐箕（福島県立博物館蔵）

写真 39 喜多方市熊倉町館稲荷神社の農耕絵馬
(右上・半唐箕、左下・本唐箕)

よる選別が行われている光景が描かれている。それぞれ万石に、箕で玄米と粳とが混じった穀物を入れようとしている光景が描かれている。万石の使用は、天保8年ごろに制作されたと見られる宮中の八幡神社の農耕絵馬や、慶徳の稲荷神社の江戸後期から明治初期にかけて制作されたと見られる農耕絵馬にも描かれている。また会津地方には、天明7年（1787）銘や文政3年銘の万石も存在している。⁽²²⁾

宮中の八幡神社の農耕絵馬には、万石と万石以前の汰板（板製の箕形^みの選別用具）が共に描かれているので、天保8年ごろは両方の農具が使用されていたと見られる。すなわち、万石は会津地方で文化・文政のころから使われるようになったと推測することもできる。

大沼郡金山町上井草で使用されてきた天保3年銘の万石には、「万石師 叶野や」という焼印がある。叶野やは、「小荒井村」ともあり、現在の喜多方市小荒井に、万石製作の専門職人が存在していたこともわかる。

万石で選別された玄米は、杓で計り俵に詰め、これを男性が肩に担ぎ、蔵に納める光景が描かれている。

(11) その他

この屏風は稲作を中心に描かれているが、その作業の季節に応じた他の作業や遊び、そして街道を往来する人々、社寺参詣の様子など様々な光景が描かれている。いわば、明治22年の人々の暮らしを絵で表した生活誌とも位置づけることもできる。

村西の山の麓には、黄色く実った畑と見られる光景がある。これは麦畑か、または粟畑か菜種畑か不明である。『新編会津風土記』の慶徳組の概説の記載には、「其土油菜大豆藍木綿ニ宜シ」とあるところから見て、「菜種畑」ではなかろうか。

村中の樹木の葉を摘む女性の姿が描かれている。その隣の水田では田の草取りが行われているところから、養蚕の桑を採取しているのもであろう。桑畑でなく、山桑のように高木になった桑の木で、高い所は梯子を掛けて採取したのであろうか、梯子も描かれている。足元には、摘み採った桑を入れる籠が置かれている。



写真40 桑摘み



写真41 菅刈りと菅運び



写真42 川での魚獲り

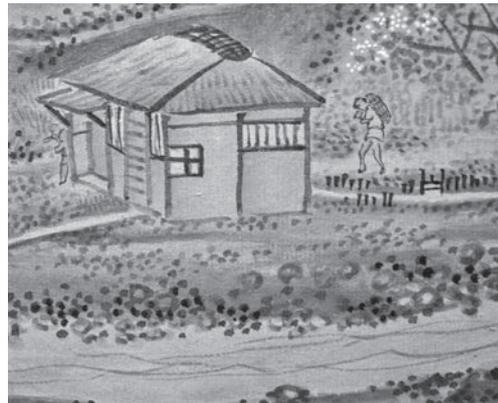


写真43 水車小屋

押切川と見られる川原では、葦か菅を刈っている光景が見られる。慶徳付近は、菅笠作りも盛んであった。刈ったものを背負っているものの長さや、刈っている鎌の大きさから見て菅と見られる。葦であれば、秋に刈るものである。

川では、大人3人が魚獲りを行っている光景が描かれている。1人は掬い網を手に、腰にはハケゴを提げている。他の2人は長い棹を担いでいる。棹の先には、板のようなものが付けてあり、これは魚を追い込むとき、水中を掻き回したり、突いて魚をおどし、網に追い込むのに使用したものである。

川のそばの小川には、水車小屋があり、米搗きにでも行くのか、米俵を背負っている男性が描かれている。猪俣氏によると、村中には水車小屋が昭和30年ごろまであったという。

また、柴や薪と見られる薪木を背負った人々が、随所に描かれている。橋の近くには、薪を背負った男性2人が休んでいる。背中当を背に着け、荷縄で薪を背負っている。薪の下部にはニンズイとかヤスミボウと呼ばれる杖状の棒を立て、荷を支えている光景が描かれている。『新編会津風土記』の慶徳組の概説に、「養水薪樵ノ便ヨク田畑多シ、」とあるように、山から採取した薪を自宅に運んでいる光景であろう。

街道や峠を往来する様々な人物が描かれているのも、この屏風の特色といえる。小布施峠を登り下りする人々は、笠を被り箱形の大きな荷を背負って、峠を下りて来る。笠を被った旅人風の人物が、峠を登っている。街道には、子供を連れた女性、羽織を着た男性、行商人風の男性、袴を着た男性等、農耕図にあまり見られない光景が多く描かれている。



写真44 薪を背負い、ニンズイを突いて休む男性



写真45 峠を往来する人々



写真46 古四王神社

古四王神社や長伝寺、その他の小祠も描かれている。その位置も、現在の位置にあることがわかる。長伝寺には、住職と見られる僧侶や境内を掃除する男性、お堂に参詣する人など信仰の様子を描いている。古四王神社は、宮司宅と見られる屋敷の様子や、参道入口にはられた注連縄や鳥居、燈籠や石段と続き、古四王神社の建築様式も、現存する姿に近い形で描かれている。

古四王神社の社殿は、三間四面、宝形造りで和様建築として珍しい。桁を支える舟肘木・軒を支える手狭、二斗や組物などに特色がある。正面中央が蔀戸、その両側が棧唐戸となっている。また内陣をおおう3枚の引戸は2枚が小さく、1枚が大きく、格子と棧唐工の併用である。拝殿の中の御神像は、北方の守護神である多聞天と思われる。顔面や腰のゆるやかなひねりなどには、平安末の様式がうかがえる。⁽²³⁾

結びにかえて

喜多方地方の江戸時代後期の農耕絵馬を宮中の八幡神社奉納のものから、また明治時代後期のものを熊倉町館の稻荷神社奉納のものから紹介してきた。両方ともに地元出身の絵師により描かれており、奉納された神社の景観を意識した上で、そこに当時の農具や服装、農法が描かれていることが指摘できた。後者には、会津地方において、近代農法の象徴と見られる除草機の使用や、馬耕による田起しの光景が描かれており、明治以後の農業の発達状況がうかがわれた。

今回紹介した猪俣家蔵の農耕屏風は、明治22年制作で江戸時代から明治時代へかけて、わが国が近代国家への発展過程の時代に描かれたものである。絵師も地元出身の小荒井輪鼎であり、前二者の絵馬と同様に、慶徳町新町の景観に合わせ、その中に稲作を中心とした農業の様子を描いている。そうした点から、前二者の絵馬と比較分析、考察でき得る資料といえる。また、文化4年の『慶徳組風俗帳』も存在することから、江戸時代後半の慶徳村付近の農業とも比較でき、熊倉町館の稻荷神社の農耕絵馬と比較分析する上では、好資料である。

小荒井輪鼎は、会津を代表する江戸後期の絵師遠藤香村の弟子の1人でもある。香村も農耕絵馬や



写真 47 猪俣泰治氏宅



写真 48 慶徳町新町地区



写真 49 慶徳町新町地区と山並みと水田

農耕屏風を描いている。そのひとつに、安政元年（1854）奉納の会津美里町永井野の熊野神社の農耕絵馬がある。これは『農業全書』の農事図に構図や描写がよく似ている。また、香村が還暦のころ（弘化元年、1844）制作したと見られる農耕屏風（6曲1双）のもの（会津若松市北会津町下荒井個人蔵）⁽²⁴⁾や、制作年代不明の農耕屏風（6曲1双）などもある。

香村も現在の会津若松市大戸町香塩村出身の絵師であることから、描かれた農具や服装、農作業の様子などは会津地方の作業とも一致する。こうした点から見て、香村そして弟子の輪鼎と、一連の農耕絵馬および農耕屏風からも、農具の変遷や仕事着の変遷をも読みとれる。今回の資料は、農作業のみならず街道や峠を往来する人々の姿や、川での漁、菅刈りや、民家や社寺の景観など、農耕以外についても考察できる資料を提供しているものといえる。

喜多方地方には、農耕絵馬や農耕屏風など農耕図が、全国的に見ても豊富に存在することが指摘できる。その理由については不明で、今後の研究課題である。喜多方市周辺には、慶徳の稲荷神社や熊倉町館の稲荷神社、駒形の稲荷神社などに、御田植祭が行われてきており、早乙女たちが神田で田植えをする御田植祭が存在するなど、農業と信仰にも関連があるのでなかろうか、研究課題のひとつでもある。

注

- (1) 佐々木長生 2009「喜多方の農耕絵馬」『民具マンスリー』41巻10号、2014「喜多方の農耕絵馬（続）——館稲荷神社明治40年奉納絵馬を中心に——」その1（47巻4号）、同その2（47巻6号）、2015

- 同その3(47巻11号)、同その4(48巻3号) 神奈川県日本常民文化研究所
- (2) 菊池健策 1993「描かれた農作業——福島県の農耕図」『近世の農業技術と民俗』福島県立博物館調査報告第25集 福島県立博物館
- (3) 菊池健策 1999「慶徳稲荷神社春夏秋冬農耕絵馬」『日本農書全集』第72巻絵農書2 農山漁村文化協会
- (4) 福島県立博物館編 1993 企画展図録『稲とくらし』 福島県立博物館
- (5) 庄司吉之助編 1980『会津風土記・風俗帳』第3巻文化風俗帳 歴史春秋社
- (6) 丸井佳寿子監修 2000『新編会津風土記』第3巻 歴史春秋社
- (7) 喜多方市史編さん委員会編 2001『喜多方市史』第9巻民俗 喜多方市
- (8) 会津の伝統野菜を守る会編 2010「会津の伝統野菜——守り・伝えます！会津の食文化」会津の伝統野菜を守る会
- (9) 坂井正喜編 1986『会津に遺る風俗図屏風』 会津若松市文化センター事業委員会
- (10) (5) 所収
- (11) 庄司吉之助他 1982『日本農書全集』第19巻 会津農書・会津農書附録 農山漁村文化協会
- (12) 佐々木長生 2004「農耕図の絵農書的存在について——会津藩絵師補遠藤香村筆農耕図を中心に——」『福島県立博物館紀要』第18号 福島県立博物館
- (13) 佐々木長生 2006「『会津農書』下巻にみる農業技術と民俗——寛延元年・文化十二年写を中心に——」『福島県立博物館紀要』第20号 福島県立博物館
- (14) 青森県立郷土館編 1993『青森県の産業絵馬展』 青森県立郷土館
- (15) 犬塚幹士 1993「馬耕犁と田植の型付杵——庄内の近代農具——」『庄内のくらしと民具』 致道博物館
- (16) (5) 所収
- (17) 長谷川吉次他 1982『日本農書全集』第20巻 会津歌農書・幕内農業記 農山漁村文化協会
- (18) (11) 所収
- (19) 庄司吉之助編 1979『会津風土記・風俗帳』第2巻貞享風俗帳 歴史春秋社
- (20) (17) 所収
- (21) 佐々木長生 1980「会津地方における脱穀・調整用具」 日本常民文化研究所調査報告第6集『紀年銘(年号のある)民具・農具調査—東日本—』財団法人日本常民文化研究所
- (22) 佐々木長生 2000「福島県における紀年銘万石——江戸時代の紀年銘を有する万石を中心に——」『福島県立博物館紀要』第15号 福島県立博物館
- (23) 川口芳昭 1985「古四王神社」『会津大事典』 国書刊行会
- (24) (12) 所収

付記

本稿を執筆するにあたり、猪俣泰治氏には調査を御快諾いただいたうえ、御多忙の中、農耕屏風に関するお話をいただいた事に深謝申し上げます。また、写真撮影は喜多方市教育委員会の蓮沼優介、片岡洋両氏が担当し御提供いただいた事を付記し、感謝いたします。